

# 幼老複合施設における子どもとの交流が高齢者にもたらす意味

道端 奈津美

少子高齢化をはじめとする社会の変化に伴い、幼老複合施設と呼ばれる新しい施設が増加している。世代間交流はその副次的効果として期待されているものであり、世代間の分離が進行している現在、その重要性が指摘され始めている。世代間交流の効果のうち、特に高齢者にとっての効果を明らかにすることは、高齢者の社会的孤立などに対する支援を考える際に重要である。世代間交流についての研究は蓄積があるものの、短期的なプログラムにおける研究が多く、近年増加している複合施設における研究はまだ十分ではない。また、複合施設で行われた研究であっても、高齢者自身に尋ねた研究が少ない、対象者が交流に積極的な高齢者のみであるという問題点が残されている。

そこで本研究では、幼老複合施設で暮らす高齢者にとっての子どもとの交流の意味を、交流に積極的でない高齢者の声も含めて検討することを目的とした。そのため、複合施設を利用する12名の高齢者を対象に半構造化面接を行った。

対象者の語りを内容分析の手法に基づき分析した結果、「肯定的な感情」「次世代への関心」「人生を顧みる」「発見の機会」「自分について考える」「非肯定的な態度」という6つのカテゴリーが抽出された。

この結果から、高齢者にとって複合施設における子どもとの交流は、生きがいを感じる（「肯定的な感情」「発見の機会」）ことで精神的安寧、活力を得ながら、「世代性」（「次世代への関心」）や「統合」（「人生を顧みる」「自分について考える」）といった発達課題を達成しつつ、自らの人生を完結させる機能を持つことが考えられる。

また、「非肯定的な態度」というカテゴリーから示されるように、交流にはネガティブな側面も存在していることが明らかになった。しかし、本研究の結果で着目したいのは、ネガティブな発言が中心の対象者でもポジティブな発言をし、ポジティブな発言が中心の対象者にもネガティブな発言が見られた点である。つまり、子どもとの交流が高齢者に与える意味としては、ポジティブな面とネガティブな面の両方があり、個人内でそれら両側面が存在していることが示された。また、全面的にポジティブに捉える高齢者がいる一方で、基本的にはネガティブだがポジティブに捉えることもある高齢者がいるなど、その両面の捉え方にはバリエーションがあるということが示唆された。本研究で得られた結果を活かし、高齢者にとって意義のある交流を検討する際には、ポジティブ・ネガティブの両面から交流の意味が総合的に見出されていることを意識すべきであるだろう。さらに、交流にあまり積極的でない高齢者に対しても、働きかけやプログラム内容によって積極的参加を促せる可能性が見出された。

本研究においては、1施設のみで行った調査であり、交流形態、施設の構造、子どもや高齢者の自立度などによって交流の意味が異なる可能性が残された。また、時間の経過に伴い交流の意味も変化すること、交流に非肯定的な高齢者であっても積極的参加を促せる可能性が見出されたことから、今後、縦断的研究や介入方法についての研究を行うことで、高齢者にとってより意義のある世代間交流を検討していくことが望まれる。（臨床死生学・老年行動学）